

風景を介して考える

through the Landscape

吉田 葵 Aoi YOSHIDA

アオイランドスケープデザイン
AOI Landscape Design



ランドスケープの仕事について考えると、頭の中のイメージが足元から遠くの山までふわっと広がっていく。私にとって、ランドスケープの仕事というのは、風景を介して、その場の「先」を考えていく仕事だからだと思う。

ランドスケープを考えるということは、その場の風景を構成する要素の個や全体、差異や共通、過去や今を、客観的に俯瞰したり、主体的に入り込んだりする。二項対立的な言葉が並んでしまったが、そう感じている。「風景/ランドスケープ」のイメージは個人によって違っており、それを垣間見ることがおもしろいし、また、図面やビジュアル、モノが立ち上がってきた時に風景が共有され、同じものを見たときは、いいなあ、と素直に思う。

ランドスケープデザインとの出会い

ランドスケープとの出会いは「みどり」についての興味とともに「芸術」の美しさに魅かれたことがきっかけだった。我々にとってなくてはならない酸素を供給するみどりを経済システム等の事情から伐採していく様子を見て、小学生の頃に胸が痛んだ。それから始まり、植物に関する見識を深めたいと横浜国立大学において植物社会学を学んだ。里山に入ってコードラートをつくり、植物を観察し、照度計をもって光を計ったりした日々が懐かしい。これらは、感覚的なものを数値に置き換え、共通認識を持てるようにする行為だったと思う。この頃は、自然が織りなすものが一番美しいと信じていた節があったが、同時期に芸術に触れる機会を得て、人が創り出すものの美しさに驚き、気になった展覧会、海外に一人旅に出て絵画や彫刻を飽きることなく見て廻った。

そうしたなかで、「科学」と「芸術」の両方の視座を持ち合わせた仕事があるのだろうか、と思い始めた。様々な方に話を聞き、お世話になり、大学3年の時に「ランドスケープデザイン」という手法に出会った。その後、大学院では、東京の崖線緑地に着目し、歴史的な変遷や自然環境の要素の双方の視点から、生態系機能の保全・向上への管理及び計画に寄与することを目的とした研究活動に勤しんだ。

修了後は、株式会社グラックに勤務し、主に公共事業における基本構想から基本設計・実施設計と実務の中で展開する一連のフェーズを経験し、設計の基礎基本を教わった。

オランダでみたランドスケープデザインの手法

海外におけるランドスケープの仕事について身をもって知りたいと、オランダに渡った。私は、滞在期間約一年の中で、学業と実務の双方を行っていた。朝から夕方までは H + N + S Landscape Architects (以下、H + N + S) というランドスケープ事務所に勤め、夜から、Academy of Architecture Amsterdam (以下、AHK) に通った。

AHK は Amsterdam University of the Arts という芸術学校の一専攻として設けられている。学業と実務を並行するシステムをとっているため、学校で学んだものを実務に反映する、その逆もしかり、相乗効果を感じられ、インプットとアウトプットの質が高まるような仕組みだった。AHK の学生は皆、実務と並行して学校へ通っていることもあり、また、すでに独立してアーティストやアーキテクトとして活動していたり、違う分野での社会経験を持っていたりすることから、プロとしての意識が高い学生が多かった。「建築」「アーバンデザイン」「ランドスケープデザイン」専攻の学生たちが一緒に学ぶ。デザインスタジオでは、異なる専攻の学生たちが同じ対象地で同じ課題に取り組むものもあり、それぞれのアプローチの違い等を傍で感じ取りつつ、意見交換できる環境がとてもユニークだった。講師陣もアーティストや研究者、実務者や行政の方々等多岐に及んでおり、多様な視点から都市を捉えること・デザインを構築していくことを重要視している教育機関であった。

その中で、特に印象的だったのは、ストーリーの構築とビジュアルアライズに対する考え方である。シンプルにコンセプトや目的を打ち出して、分かりやすく共通認識がとれるようにすることについて徹底的な指導を頂いた。いかに伝わりやすく、論理立ててストーリーを構築していくかが重要視されており、よく学生同士でも議論した。また、様々な人が理解しやすく、イメージを共有できるようなグラフィックを描く重要さもオランダでの体験で身に沁みだ。これは、オランダという国が多国籍かつ多様な文化を内包していることが影響しているのかもしれない。都市に関わる登場人物はそれこそ多岐に及ぶため、重要な姿勢を学んだと感じている。

H + N + S では、様々なプロジェクトに関わらせて頂いた。その半数以上が都市インフラのプロジェクトであったことが、驚きだった。それらは、高速道路、堤防、水門やエネルギーを扱うものである。

現在、ヨーロッパにおいて、パリ協定のもと各国がCO2削減に取り組んでいる。エネルギー問題に対して、H + N + S は、Room for Energy と題し、ランドスケープデザインの手法を用いた提案を行っていた。それは、NOORD-VELWE という地域スケールでのプロジェクトである。土地利用のタイポロジーの分析を通して各土地利用区分におけるCO2排出量とストック量を、文献を用いて科学的に算出する。その上で、CLAY Landscape / SAND Landscape…（オランダは地形が平坦であるため、土壌の差異で景観を区分することが多い）は、どのように風景を変化させていけるのかということ、提案していた。印象的なパースを鳥瞰やアイレベルで作成し、ビジュアル・数値・シンプルなダイアグラム等を用いて表現することで、空間とその根拠が伝わりやすいカタチで示されていた。

もうひとつは、協働ということがあげられると思う。高速道路をグリーンインフラへ転換していく「リングプロジェクト（ベルギー・アントワープ）」では、規模も大きく、土木・構造・都市デザイン・建築・コミュニティデザインといった専門事務所及び行政と協働していた。デザインワークショップ等を行いながら、ひとつの敷地をどうデザインしていくのだろうかと、最初は思っていたが、その中で、ランドスケープアーキテクトが、ランドスケープシステム（ウォーターシステムやグリーンネットワーク等）の提案を行いつつも、各専門家のアイデアを一枚の絵にまとめていく役割を担っていた。もちろんプロジェクトによって、立ち位置は様々ではあったが「協働」していくということが当たり前という感覚がここにはあることを感じ、コンペの要綱にもほぼ入っているという状況であった。

こういったプロジェクトが進む一方で、ヒューマンスケールの広場や舗装の改修、高層ビルの緑化のプロジェクトもあったので、改めて「ランドスケープデザイン」のフィールドは地続きに多岐に広がっていることを感じた。

また、Research by Design / Design by Research という言葉を滞在中よく耳にした。このアプローチは、リサーチとデザインが一方通行の関係ではなく、デザインすることで発見をし、またリサーチに反映させてデザインを深めていく。そして、研究の分野とデザインの分野が相互に貢献しあうことを目的としたアプローチでもある。風景とはそもそも発見することから始まっている、といった意味でも非常に興味深く、リサーチとデザインの相互作用・相乗効果から生まれるものは力強くと感じている。

これからのランドスケープについて考えること

オランダから帰国し、約1年と半年が経つ。

これからのランドスケープの仕事について考えると、それは風景づくりにいかに向き合うのか、という事を意味しているのだと思う。ここまで国内外の経験を通し、風景を介して、どのようなことに取り組むことができるのか考えはじめると、アプローチの多様さや協働していくことで広がる可能性を感じられ、気持ちが高まる。

現在、能登地域に位置する珠洲市嶋島町を対象にして、スローツーリズム / まちづくりのお手伝いをさせて頂いている。里海里山を代表とした自然のシステム、祭りをはじめとした古来の文化を俯瞰しつつ、現代の暮らしから仰視して、新しい風景の姿を捉えていく。ランドスケープデザインのリサーチ手法としてレイヤーアプローチを用いながら、まちの方々とワークショップを行い、デザインに取り組んでいる。

また、研究者の方々と協働しながら、デザイナーとして参画しているプロジェクトも進んでいる。Multi-species Cities という新たな概念の研究内容を基盤にしている。京都市を対象として、土地分析等のリサーチを行いつつ、デザインを構築し、新たな風景をビジュアライズしていく。

風景を介して、その場の先を思考し、またランドスケープデザインの手法やアプローチの広がりや可能性を感じる日々である。

その文化、環境、社会状況といった時代背景によって、その場で捉えられる「風景 / ランドスケープ」は刻々と変化している。だからこそ、ランドスケープデザインの手法には、路上観察的なまなざしを持つものから、科学的方法に基づくものまであり、デザインのアプローチも多岐に及んでいるのだと思う。風景 / ランドスケープを介して、その「場」にあるものを見つめ、課題を発見しながら、新しい価値を生み出す、という姿勢で、私自身はリサーチとデザインの相互作用から生み出される新しい風景について手探りに掘り下げて向き合っていきたいと思っている。今は、一歩ずつ着実に、という思いである。

そして、今後のランドスケープデザイン分野の可能性の発展に貢献できる事を願っています。

（略歴）

1987年神奈川県横浜市生まれ。
横浜国立大学 教育人間科学部 植物社会学専攻 卒業。
東京大学大学院 都市工学専攻 環境デザイン研究室 修了。株式会社グラク設計部に3年間勤務後、フリーランスデザイナーを経て、オランダへ渡る。H + N + S Landscape architects 勤務、Academy of Architecture Amsterdam ランドスケープデザインコース留学。2019年アオイランドスケープデザイン。